

父との走り込み 原点

聖地で力投 光星エース福山選手(八戸出身)

「最後の夏」涙と感謝

完全な力負けだった。八戸学院光星の主戦福山優希投手(八戸市、市川出身)は涙に暮れた。少年時代から憧れだった「光星のエース」を勝ち取り、たどり着いた夢の聖地。本塁屈指の豪腕を披露した背番号1は、カクテル光線が照らす甲子園のマウンドで、最後の夏を終えた。
(高松拓輝) 【1面参照】

福山選手の原点は、父と毎日続けた10分ランニングにある。中学3年まで5年間、父・健一さん(48)と八戸市と一緒自宅周辺の起伏のある道路を走り込んだ。「光星の背番号1を付きたい」一心だった。

きっかけは小学5年のとき。小学校の軟式野球部で投手だった福山選手は「コントロールを良くするにはどうすればいいの」と父に相談した。健一さんに野球経験はなかったが「投手といえは走り込みだ」と息子を日課のランニングに連れ出した。小学校までは6分、中学3年間は10分に距離を伸ばした。雨の日は雨具を、雪の日は上着を着込んだ。「や

か一緒に考えてくれた。ここまで野球に夢中になれたのは父のおかげ」と福山選手。

光星に入学した福山選手は中学時代までの努力も実り、2年生の夏に背番号1を背負った。しかしリリーフした青森大会決勝で敗戦。その悔しさをばねに練習を続けてきた。「これまで悔し涙はたくさん見せてきた」と健一さん。「最後の夏だから、笑って終わってほしい」。そう言って息子を送り出した。

集大成の夏、仲間とともにたどり着いた甲子園。「ふがないない投球だった」と福山選手は大粒の涙をこぼしたが、「父にはとりあえず(最後の試合が)こんなでごめんと言いたい」と少し笑った。「ここまで自分を支えてくれた。本当に感謝したい」

れることはやったと思う」と健一さん。「ただ、まだまだそんなに甘くないということ。これから先にある目標に向かってがんばってほしい」とねぎらった。

健一さんは同日、アルプススタンドで観戦。甲子園のマウンドに立った息子の姿を目に焼き付けた。「や